

『人間形成』創刊号*

一九四八年十月(高倉嘉保)

福澤諭吉に叱られる話

矢口 新

福澤諭吉は明治五年二月『学問のすゝめ』第一篇を出し同九年までに第十七篇を書きあげた。彼の書いたものが当時の青年に如何に訴えたかは今でも老年の人に聞けばよくわかるのである。福澤自身も、国民の中百六十人に一人は此の書を読んだであろうと言っている。

教育に関するものでかくの如く日本人に影響を与えたものは空前絶後といえよう。この思想が日本教育の現在をつくりあげているといつても過言ではないのである。近代日本人の学問観や教育観はここから出発しているといつてもよい。

併し不思議なことに現在われわれが『学問のすゝめ』を読み直してみると依然として教えられる所が多いのである。否、こんにち普

通一般の人のもっている教育観や学問観を訂正するものさえももっているのである。こんにちの人は福澤に叱られるのではないかと思ふのである。

近頃世上の様子をみると識者の中で改革を唱える者は口を開けば西洋文明のすぐれた事を述べ、万人がこれにならっているではないか、若しこういう事情を例えて言ってみるなら、日本人が仮りに、煙草を吹かして、西洋人が煙管を使うならば、改革論者は、日本人は機械を使うことが出来ないのだから煙管を發明していないと言ふであらう。こういう状態が現在の有様だ。物にはそれぞれ個性があるのであつて、異なつた習俗を取り入れるにはよく考慮してなすべきではないか。これは福澤が『学問のすゝめ』十五篇の中で言っていることの一部を易訳したのであるがこういう有様をわれわれは今の教育界にみるのである。

新しい教育が行われているけれども、二言目にはアメリカではどうやつているかという事が聞かれたのである。日本人はどうやらそういう性格は天性であるのかもしれない。

「我人民の精神に於て此数千年の習慣に疑を容れただ其原因を尋れば、初て国を開て西

洋諸国に交り彼の文明の有様をみて、其美を信じ之に倣はんとして我旧習に疑を容れたるものなれば、恰も之を自発の疑と云ふ可らず唯旧を信ずるの信を以て新を信じ昔日は人心の信頼に在りしもの今日は其処を移して西に転じたるのみにして其信疑の取捨如何に至つては果しての当の明あるを信ず可らず」

これを現代語に直してみたらどういふことになるであらうか。現在の民主主義は与えられた民主主義であつて、自ら切り開いたものでないというといふあの何時も言われる言葉になるのであるまいか。今頃何を言っているのだという言葉が、若し福澤が生きていたら当然出ると思わなくてはならぬ。

十二篇に「演説の法を勤るの説」というのがあつて、「学問は唯読書の一科に非ずとのことは既に人の知る所なれば今これを論弁するに及ばず学問の要は活用にあるのみ活用なき学問は無学に等し」ところ大段に振りかぶつてから、「学問の本趣意は読書のみならずして精神の働きに在り此働を活用して実地に施すには様々の工夫なかる可らず『オブセルヴェーション』とは事物を視察することなり『リーゾニング』とは事物の道理を推定して自分の説を伝えることなり此二箇

条にては固より未だ学問の方便を尽したりと云ふ可らず尚この外に書を読まざる可らず書を書かざる可らず人と談話せざる可らず人に向て言を述べざる可らず此諸件の術を用ひ尽して始て学問を勉強する人と云う可し即ち視察、推究、読書は以て智見を集め談話は以て智見交易し著書演説は以て智見を散ずるの術なり然り而して此諸術の中には或は一人の私を以て能ず可きものありと雖ども談話と演説に至つては必ずしも人と共にせざるを得ず演説会の要なること以て知るべきなり」

と言つてゐる。最近新しい教育がはじまつて子供は事物の視察をやり、デイスカッションと称し談話、演説をやつてゐるのである。私なども盛んに新しい教育の考え方をあちらこちらで話すのであるが、これも福澤に叱られそうな話である。

「然るに学問の道に於て談話演説の大切なことは明白にして今日これを実に行ふものなきは何ぞや学者の懶惰と云ふべし」と誠に恐れ入る外ないのである。日本人は話の下手な国民であつて、大ぜい集まつた時に話すことはとくに下手なのである。これはなまけているからだといふのである。それでは学問をしていないのだといふ事になるのである。

所で大切なことはこの学問についての考え方である。福澤のいうことはわれわれが今そういう言葉で頭に思い浮かべることとはだいぶ異なるのである。第二篇に

「唯文字を読むのみを以て学問とするは大なる心得違なり文字は学問をするための道具にて例えば家を建るに鋸鋸の入用なる如し」

「文字を読むことのみを知て物事の道理を弁へざる者はこれを学者と云ふ可らず」

「我邦の古事記は暗誦すれども今日の米の相場を知らざる者はこれを世帯の学問に暗き男と云ふ可し経書史類の奥義に達したれども商売の法を心得て正しく取引を為すこと能はざるものはこれを帳合の学問に拙き人と云ふ可し」

「此書の表題は学問のすゝめと名付けたれども決して字を読むことのみを勧るに非ず」と有名な説明があるのである。彼によれば学問とは精神の働きを問題にしているのである。だから世帯も帳合も学問なのである。若しこういう学問が人民一般の間に普及していれば、

「方今我国において最も憂ふべきは人民の見識未だ高尚ならざるの一事なり」というようなことは言わなくてもよいのであるが、現

在でも依然としてそういう状態なのである。

「人の見識品行は微妙なる理を断ずるのみにて高尚なるべきに非ず」

「又人の見識品行は唯聞見の博きのみにて高尚なる可べきに非ず」

「然らば即ち人の見識を高尚にして其品行を提起するの法如何にす可や其要訣は事物の有様を比較して上流に向ひ自から満足することなきの事に在り」こういう意欲を以て世帯や帳合のことを考え改めていく、進歩せしめていくことが即ち彼の学問なのである。

成程そう言われるとわれわれは尤もだと思つのである。われわれは学問といへば自分の生活とは遠い所にあるものを書物をもつて知り、微妙なことを談ずることだと考へていたのである。それでは我が国の生活はたかまらないのである。ただ外国のすぐれたものをあれよあれよと見守るのみなのである。そういう学問はしても役にたたなかつたことは今のわれわれの生活が実証している。これでは福澤に叱られるのである。

(中央教育研究所員)

*ライブラリー編集部注

教育雑誌『人間形成』の編集は矢口が行つていた。